Insomnia

灯子

やかな、いつもと変わらない景色があった。ショータはここを、どこでもないところと名付けていた。

このところ、ショータはここにやってきて行ったり来たりを繰り返してばかりいた。どこまでもずんずんと行き過ぎて歩くのをやめられないときもあれば、立ち止まって辺りを見回し、そのまま一歩も動けなくなるときもあった。

歩くこと、それがここでショータがやることだった。しかし、歩いて行き過ぎてしまうと二度と戻って来れなくなる気がして、そんなときには慌てて引き返していた。けれど戻る瞬間にはもう引き返すことを後悔し始めていて、立ち止まってしまう。そうそのうたによばれていたから、きこえるほうへいった。

いつもの時間になり、ショータはいつもの場所に来ていた。

立って辺りを見回せば、どこまでも広がって行くようで今にも全てが吸い込まれそうな、不気味で穏

やって一度歩くのを止めると決まって脚が痛くなり、そうしたら移動することはあきらめて、辺りのなにも変わらない景色を見て、溜め息をつくのだった。

そんなときは、ショータは歌うことにしていた。歌はあまり好きではなかったが、ここでは他に気を紛らわせることがなく、ショータ以外に誰もいないから音の外れた歌を聴かれる心配もなかったが、それが少し寂しくもあった。

ショータの歌う曲はいつも同じ曲だった。それはどこでもないところに来るようになってから覚えた歌で、ショータはこの曲だけは上手に歌うことができると思っていた。

ここに来るようになってどのくらい経ったのかはわからないが、ある日、ショータは歩き疲れてしゃがみ込んでいた。再び歩き始めるまでと思って、小さな声でいつもの歌を口ずさんでいると、隣に少女がやって来た。ショータは歌を止めて顔をあげた。

それは、ずっと前からそこにいたかのようにショータの隣に立って、不思議そうな顔でショータを見下ろしていた。

ショータは尋ねた。

——きみはだれ？

——インソムニア

それだけ言って、インソムニアは小首をかしげた。

——うたうの、やめちゃうの？

ショータは頷いて答えた。

——インソムニアが、来てくれたから

インソムニアは首を振った。

——わたし、あなたのうた、すき

——ほんとうに？

——うん、すき

——なら、歌うよ。だからインソムニア、ここにいて

ショータは祈るようにインソムニアを見上げた。

インソムニアは頷いた。

――あなたのうた、すき

それから、ショータは座って、歌い始めた。今までとは違う、楽しい旋律の曲を歌った。その隣ではインソムニアが踊っていた。踊るインソムニアを見て、ショータはこの場所に来るようになってから初めて、歌うことを楽しいと思った。

ショータの歌でインソムニアは踊り、踊るインソムニアを見ながらショータが歌っていた。行ったり来たりなんて、もうショータには必要なかった。インソムニアさえいれば、いつまでもここに座っていて、それでいいような気がしていた。

インソムニアの踊りは自由だった。ゆっくりと優しく拍子を刻むこともあれば、急に激しい動きをすることもあり、激しかった次の瞬間には、もう穏やかになっていた。そんなインソムニアを見ているとショータは胸騒ぎを感じて、もっとインソムニアに似合う曲をと、さらに思いを込めて歌うようになった。

ショータは歌える限りの曲を歌っていたが、曲と曲の間、息をつく間にもインソムニアが消えてしまうんじゃないかと、いつも怯えていた。ショータの声は、だんだんと以前のような小さな声に戻りつつあった。しかしショータはそれに気がつかないふりをして、インソムニアのために明るい曲を歌い続けた。

それでも、インソムニアはあまり踊らなくなっていった。踊るのをやめて、出会ったときのような顔でショータを見ることが多くなっていた。

ショータは歌うことに疲れていた。けれど今となっては立ち上がることもできなかったから、歌うしかなかった。明るく楽しい曲を歌うことはもうできなくなっていたから、インソムニアと出会ったとき

に歌っていたあの曲を、何度も何度も繰り返して歌った。

しかしインソムニアはショータの元から去っていった。それは現れたときと同じように、ある日突然いなくなってしまっていた。ショータはそれに気づかずにしばらく歌い続けていたが、とうとう声が出なくなり、それでようやく、踊るインソムニアの姿がないことに気がついたのだった。

ショータはもう、一曲も歌えなかった。何回も歌ったあの曲でさえ、声に出してもかすれた吐息になるだけだった。

歌を聴き、傍らにいてくれるインソムニアはもういなく、立ち上がって歩いて行くこともできない。ショータは、座り込んだままどこでもないところを見渡した。どっちを向いてもどこまでも続く、平坦な世界が広がっているだけたった。不気味で穏やかで、静かな世界だった。ショータは急に、ここにいることが恐ろしくなった。

――インソムニアがいないなら、もうここにはいられない

ショータは息を吸うと、手を伸ばして地面を掴み、脚を蹴った。体を引っ張り、少しずつ、一歩一歩動き始めた。

這いずりながら、ショータはインソムニアの気まぐれな踊りを思い出していた。そして、もしもまたインソムニアに出会えるとしたらそこはきっと、夢の中だろうと思った。

この進みでショータがどこに行こうとしているのか、ショータにはまるでわからなかった。ただ、気がつくとまたあの曲を、声にならない声で歌おうとしていた。

どこでもないところの片隅で、ショータはひとり、出口を目指し続けていた。